5章 評価の仕組み、共通科目創設、人材育成目標からの改革、形から入る教育……
―新しい工夫は、学生が成長する新しい教育の姿

本物はいいが、継続も大事

「社会人基礎力」は、「自ら考え行動し、しかもそれを他人と一緒になす経験」が深いほど、大きく成長します。さらにその発揮を通して、経験がより自分に生かされ、学ぼうとする機会になり、高い満足感が得られれば得られるほど、「社会人基礎力」は一段と高まっていきます。

したがって、「1回限りの本物の経験」も大事ですが、継続的にさまざまな場面で提供される経験も重要です。そのためには、大学だけでなく小中学校、高校や家庭も含めてそのような場作りがなされることが理想ですが、大学でも、なるべく多くの授業や活動の中で、「社会人基礎力」が高められるような場が学生に提供されるべきでしょう。

「PUSH」としては、授業評価を通した教員の気付き・改善など
～三重大学

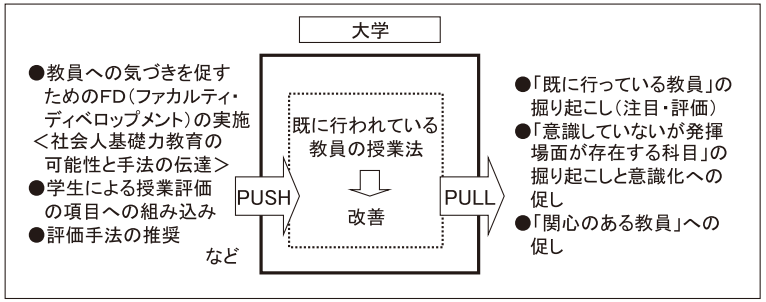
そのためには、3章の巻頭で紹介したように、既にいろいろな授業科目の中で何らかの形で「社会人基礎力」の育成がなされているのですから、教員にその大切さに気付かせ、取り組みを後押ししていくことが大切です。

教員の取り組みを後押しする「PUSH」部分としては、ファカルティ・ディベロップメントとして、教員自身にまず「社会人基礎力」の重要性に気付かせ、その育成のための授業方法を考える機会を設けることが必要です（上図）。

学生に受講後の授業の満足度や感想をアンケートで回答させ、その結果から授業評価や効果の測定などを行う場合は、その授業において「社会人基礎力」が高まったかどうかを聞く質問を、アンケートに設ける方法が考えられます（三重大学の例）。その際には、能力要素を、授業の内容や学生の生活に合わせた表現に直して質問すると、学生も理解しやすいと思われます。p401に「授業の受講者に対するアンケート項目（例）」を用意しましたので、参考にしてください。このようなアンケートの結果から、教員が自分の授業の特色に気付くこともあるでしょう。また、ここでの設問は、「社会人基礎力」も含めて、いずれも大切な力や姿勢ですから、そこから自らの授業で力を入れる育成目標を考えていくこともできます。

また、成績につながる評価の中に「社会人基礎力」を取り入れるのも一つの方法です。これに関する事例は、東海大学と日本文理大学の事例を紹介しています。

大学全体への社会人基礎力の育成の普及について①
<基本的考え方～既に実施している科目から>



「PULL」としては、「社会人基礎力の育成」という観点での教員表彰制度も

一方、前頁上図の教員の取り組みに注目して、スポットを当てる「PULL」としては、既に「社会人基礎力」育成の取り組みを行っている教員を、掘り起こす作業がまず必要であると思われます。既に「ベストティーチャー」として表彰する制度がある大学も多いと思います。そもそも評価の高い授業では、「社会人基礎力」が育成される場合が多いですが、特に「社会人基礎力の育成」という観点で、スポットを当ててもよいのではないでしょうか。このような教員に授業の方法を紹介してもらい、冊子にして学内に配布するのも一つの方法です。また模擬授業や、授業見学の機会を設けるのもよいでしょう。

また、既に開講している科目から、発揮場面が含まれているものをピックアップし、その育成に関心のある教員を集めて、まず「社会人基礎力」について伝えた上で、教員同士で育成方法を話し合う会合を設けるのもよいでしょう（個々の授業の改善方法については、3章の巻頭を参照）。

制度的な面での改革としては、学生が一つの授業に対して十分に時間が取れるように、学期制や授業時間、さらには学生の授業取得数の制限などの課題の検討も必要でしょう。シラバスに関しても、授業が始まる半年近く前に、教員に原稿の提出を求める例も見られますが、4月から始まる授業に対して前年の11月に授業案を立てるのでは、目の前の学生に合わせて教材や展開方法を変えていくことは不可能です。シラバスの原稿の提出を授業直前でも可能にしたり、授業を進めながら柔軟に作り変えられるようにするなど、授業の工夫をしやすいシラバスの運用のあり方も、検討項目の一つになるでしょう。

授業の受講者に対するアンケート項目(例)
―各教員の授業計画に合わせた授業改善にも有効

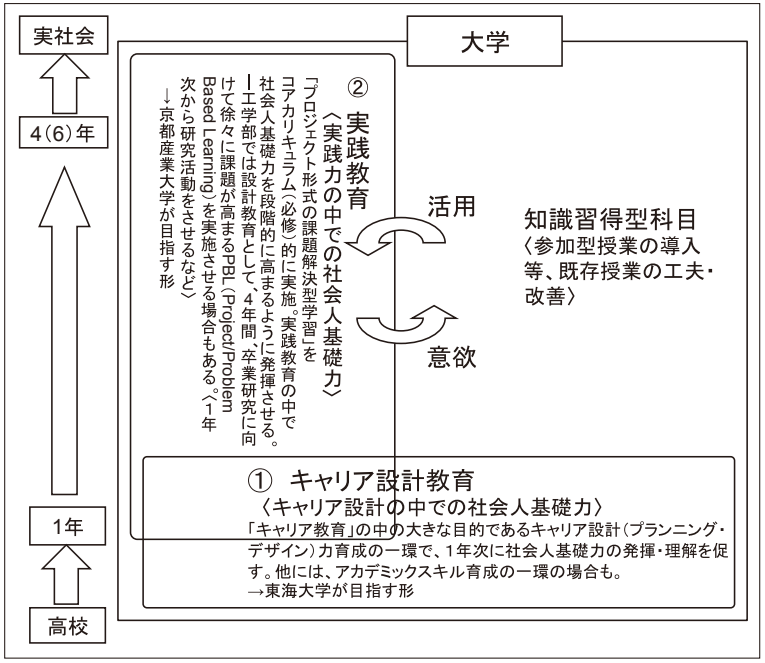
設問　この授業を通して、以下の知識・能力・姿勢などは高まった(身についた)と思いますか。
それぞれについて1～5のどれか１つに○をつけてください。

	1	2	3	4	5
	高まらなかった	あまり高まらなかった	どちらともいえない	やや高まった	大変高まった
1.専門的な知識	1	2	3	4	5
2.専門分野の背景にある考え方	1	2	3	4	5
3.研究や調査の方法(インタビュー、パソコン、統計ソフトなど)	1	2	3	4	5
4.専門技術・スキル(プログラミング、カウンセリングなど)	1	2	3	4	5
5.専門知識を応用・実践する力	1	2	3	4	5
6.真理を探求していくことへの関心	1	2	3	4	5
7.知的好奇心	1	2	3	4	5
8.大学時代に積極的に学んでおこうとする気持ち	1	2	3	4	5
9.勉強の仕方や習慣	1	2	3	4	5
10.ありのままの自分を認めていく気持ち	1	2	3	4	5
11.難題・困難に挑戦する姿勢・意欲	1	2	3	4	5
12.前向きに考える姿勢	1	2	3	4	5
13.自らの考えに責任を持ち行動する力、自律性	1	2	3	4	5
14.目的実現のために他人に積極的に働きかける力	1	2	3	4	5
15.物事を計画的に確実にこなす力	1	2	3	4	5
16.高い目標を持ち、粘り強く努力する姿勢	1	2	3	4	5
17.問題の本質を理解するために論理的に考える力	1	2	3	4	5
18.情報を収集・整理する力	1	2	3	4	5
19.問題を解決する力	1	2	3	4	5
20.広い視野で計画を立つと同時に、柔軟に変えていける力	1	2	3	4	5
21.工夫や斬新な発想を生み出す力	1	2	3	4	5
22.意見やものごとを他人に上手に説明する力	1	2	3	4	5
23.他人の話をしっかり聞き尊重する力	1	2	3	4	5
24.自分とは異なる意見に対しても、広い視野で柔軟に理解・対応する力	1	2	3	4	5
25.周りの人たちの状況や考えを把握する力	1	2	3	4	5
26.自らの役割を理解する力	1	2	3	4	5
27.自ら進んで仕事や奉仕的な活動をする姿勢	1	2	3	4	5
28 他人への配慮や思いやりを持ち、協力していく姿勢	1	2	3	4	5
29.正義を重んじ、偏見なく公正に物事に当たることができる姿勢	1	2	3	4	5
30.ルールやマナーを守り尊重する姿勢	1	2	3	4	5
31.ストレスに対して上手く処理する力	1	2	3	4	5
32.自分を理解し、制御し、評価する力	1	2	3	4	5
33.生活を豊かにしようとする姿勢	1	2	3	4	5
34.将来の仕事や人生に対するビジョン	1	2	3	4	5

課外活動で、何が提供できるかの検討も！

また、クラブやサークル、あるいはボランティアなどの課外活動として、大学はどのような活動を提供できているのか、できる可能性があるのか。さらに、課外活動の中で4年間を通してどのように学生の「社会人基礎力」が育成されるのかを把握し、その上で何を提供するかを検討していくこともまた重要でしょう。

大学全体への社会人基礎力の育成の普及について②
<学生全員が社会人基礎力を理解するための戦略的科目を設置する考え方>



キャリア設計能力の育成の一環で、社会人基礎力の発揮・理解　～東海大学、宮城大学

多くの学生に、「社会人基礎力」の発揮場面を経験させ、理解させるために、カリキュラムの中で、特定の科目を意図的に教育科目と位置付け、設置するという考え方もあります。

1年次の段階で、キャリア教育のキャリア設計能力育成に関する科目や、コミュニケーション能力育成を中心にする科目、あるいはアカデミックスキル育成を中心にする科目などを用意し、できるだけ多くの学生に受講させ、そこで「社会人基礎力」を発揮・理解させ、その理解をもとに、4年間を通して「社会人基礎力」を育てる経験をさせるように仕向けていくという方法もあります（東海大学）。

宮城大学（4章）では、コミュニケーション能力の育成を中心とする1年生の「基礎ゼミ」の終了時に、「社会人基礎力」の理解を促すガイダンスをキャリア設計の考え方で織り込み、その後の3年間の大学生活で、自らそれを高める経験を作っていくよう仕向けました。

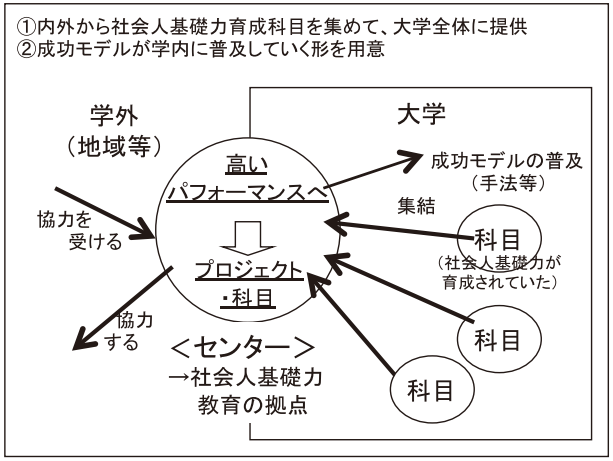
また、そのような1年次の教育を受けて「社会人基礎力」を理解した学生を選抜し、2年次以降で教育補助員（Teaching Assistant ＝ＴＡ）として養成し、教員が行うさまざまな授業で、「社会人基礎力」を学生に発揮させる場面作りに協力させている事例もあります（三重大学）。

継続的な実践教育で社会人基礎力の発揮を経験、知識習得との相乗作用を！　～工学系学科、静岡県立大学、京都産業大学

また、コアカリキュラム（必修）的に、実践教育としての「プロジェクト形式の課題解決型学習科目」を4～6年間継続して受けられるようにする考え方もあります。その中で、学生は、「社会人基礎力」を発揮する場を経験し、知識習得型科目の受講に際しては、そこで得た気付きを、能動的に取り組むための学習意欲にしていこうというカリキュラムです。そしてさらに知識を実践場面に生かすことで、「社会人基礎力」をより高める経験の場に変えていこうというものです。

工学部などでは、設計教育として、４（または６）年間、卒業研究に向けて徐々に課題のレベルが高まるプロジェクト形式の課題解決型学習を実施させる場合もあります。そのような場を軸にして、学生から見れば大学全体を発揮経験をする場と変えていくわけです。研究室を軸にして、それを実施している事例が、３章に紹介した静岡県立大学です。また京都産業大学の新たな産学連携によるプロジェクト科目（Ｏ／ＯＣＦ-ＰＢＬ）が、受講生を増やしていくことで実現していくのも、このモデルと言えましょう。

大学全体への社会人基礎力の育成の普及について③
<新設センターを特区とさせる方式>ー広島経済大学の例ー



大学内に、外部とつながった「特区」を作り、大学のコアに据えた～広島経済大学

ところで、「社会人基礎力」の育成を大学全体に広げるのが難しい一つの理由は、従来の大学の学問に閉じた科目設計では、その実施が難しい面があるからでしょう。別の言い方をすれば、授業に異質性を上手に取り込みつつ、「社会人基礎力」の発揮の場を作っていく必要があるからです。その意味で、多くの「社会人基礎力」育成の試みが「特別区域（特区）」的な環境で行われているように見えるのは、不思議なことではありません。したがって、大学としてその育成に取り組むためには、「特区」を作って、そこを育成の場とする方法もあります。

広島経済大学は、学外に開かれ、自由な発想の科目を用意するセンターをまず作りました。そこに、学内外から「社会人基礎力」を発揮する場を持つ科目を集め、さらにそのセンターで実施することで、本格的に「社会人基礎力」が発揮・育成される科目にしていくという形を取ったのです。その結果、多彩な「社会人基礎力」育成科目が作られることになりました。このセンターで学ぶことで、学生も意識的に自らを高めるようになることも、大きく関係していると思われます。そして、そこから成功モデルが学内に広まっていくような形を作っています。

このような学内・学外をつなぐ中間的な場を創造するのは、「社会人基礎力」を高める場面をより多く、より本物に近く作るための一つの環境条件であると言えます。３章の静岡県立大学では、研究室を「中間スペース」と称しています。

確固たる人材育成目標があれば、おのずと社会人基礎力教育は行われる～日本文理大学、岐阜大学医学部医学科

「社会人基礎力」を育成する教育科目を、学内に普及するための基本的な考え方には、大学・学部・学科の人材育成目標を明確にしてカリキュラム全体の検討を行い、開講科目の役割や教育内容などを検討し、その結果、「社会人基礎力」の育成をさまざまな科目で行っていくように変えるという改革があります。これは、いかなる仕事でも、働く際には必ず「社会人基礎力」は求められるので、人材の育成の方向を明確にした改革をすれば、おのずと「社会人基礎力」を育成する科目を作らざるを得ない、という考え方の上に立っている方法です。医学部や、ＪＡＢＥＥ（日本技術者教育認定機構）の認定が浸透した工学部が、「社会人基礎力」の中核的能力であるコミュニケーション能力を要件として必ず

掲げるのは、この明確な人材育成目標を持つからだと考えられます。これを大学・学部・学科ごとに行う、ということなのです。

ここでのポイントは、大学自身の合意の言葉として、その目標をいかに明確化できるか、さらに個々の科目目的の中で必ず優先的な目標にするように、各教員をいかに指導できるか、などであると思われます。この考え方で、「社会人基礎力」の育成を学内に広めているのが日本文理大学です。「社会人基礎力」を包含する「人間力」を目標に立て、個別科目の成績につながる学生評価にまで落とし込もうとしている取り組みは特筆できます。

この育成目標を明確化し、そこからカリキュラム、さらには各科目の見直しを行い、学科全体に「社会人基礎力」の育成を広めている典型的な事例が、医学科です。入学する学生が、ほぼ全員専門職として医師や医学研究者になる学科での教育ですから、その方法の展開は徹底しています。平成21年度のモデルプログラムとして取り組んだ、岐阜大学医学部医学科の取り組みを参考事例として紹介しました。

形から入り、行動変容にいたる
～愛知学泉大学家政学部

ところで、企業の中には「成果につながる能力＝コンピテンシー」を独自に決め、その能力項目を高めさせることで、社員を自立に導く人材育成の方式を取っているところもあります。これは、決められた能力を常に意識し、発揮するよう努めることで、それにつれて意識が変わり、本質的に行動スタイルが変容するという考え方に基づく教育です。ある意味、形から入る教育です。

その考え方と方法を、大学教育に取り込もうとしている事例として、愛知学泉大学家政学部を紹介しました。4年後の目標として管理栄養士という専門職に就くために、1年次から「社会人基礎力」を強く意識するトレーニング科目を用意し、目標実現に向け、学生達に行動変容を促す教育に取り組んでいます。「社会人基礎力」を、目標の実現に向けた活動に取り入れるというこの教育は、教育のあり方を考える上で、大きな示唆を持つものと言えます。

◇

以上のように、「社会人基礎力」の育成は、多様な理解や方法のもとで大学教育に取り込まれつつあり、それが大学教育の活性化や個性作りにつながっていることがわかります。「社会人基礎力」の育成というと、実社会で働くために必要な能力だけを育てることを求めているように思われがちです。しかし決してそれは、大学の自由や個性を奪うものではありません。むしろ、従来から考えられてきた大学教育のあり方を進めることにも十分貢献しているのです。

とりわけ、学生と向き合う教育の場を広げていくには、大変有効であると思われます。その意味で、各大学・学部・学科・専攻、そして教員の方々が、目指す方向への改革を推進していく中で、十分活用可能な考え方だと言えましょう。